

## 第 49 回若手研究者・院生情報交換会 報告

テーマ：研究を続ける情熱の生成と維持—あなたの Passion はどこから？—

開催日時：2022 年 1 月 22 日（土）15：00～18：00

会場：WEB 開催

報告：遅 力裕（同志社大学社会学研究科助手）

第 49 回若手研究者・院生情報交換会が、2022 年 1 月 22 日（土）にオンラインにて開催された。テーマは「研究を続ける情熱の生成と維持—あなたの Passion はどこから？—」であった。関西地域を超えた 32 名が参加した。

情報交換会の最初に、関西社会福祉学会・日本社会福祉学会関西地域ブロック担当理事の所めぐみ氏より大会開会の挨拶をいただいた。続いて、立命館大学の呉世雄氏によって「若手研究者の自己マネジメント—研究のパッションと資源管理」というテーマで基調講演が行われた。呉氏は、これまでの経験を通して研究を続けられたことについて「楽・人・悩」三文字を提示した。研究の楽しさ、研究仲間または模範モデルの必要性、そして常に自分の研究の社会的意義を悩んでいたこと、が述べられた。続いて、投稿論文の修正、研究者のミッションについて講演が展開され、研究は自分のためだけでなく、社会（福祉）に貢献できる研究成果が重要であることが強調された。最後に、研究者にとっての自分に合う資源（人、物、情報、金）の管理と開発の必要性および方法について紹介された。若手研究者の自己マネジメントという視点で、研究を続けるための示唆に富む応用性が高い内容であった。

基調講演に続いて、「—あなたの Passion はどこから？—」というテーマで、シンポジウムが行われた。シンポジストは、引土絵未氏（日本女子大学）、松尾敬子氏（同志社大学大学院生・国連職員）、羽鳥恵一氏（同志社大学大学院生・宇治おうばく病院精神保健福祉士）であった。

まず、引土氏は「研究の源泉」というテーマで、研究の問題意識の源流、研究継続の危機等について話を展開した。家庭での原体験から「弱さ」を認めない社会のあり方を意識し、エモーショナルリテラシー（感情による知性）に注目したこと。その後、育児と転居によるフィールド・キャリアの断絶によってもたらされた失望をきっかけに問題意識の原点に立ち戻り、関東で実践や研究のグループを作り、研究環境を確保したこと、が語られた。最後に、ライフイベントと研究の両立のため、意識して優先順位をつけること、研修に参加すること、チャンスをつかんで挑戦することなどのアドバイスが述べられた。

続いて、スイスにいる松尾氏は国連での勤務経験を通して「わたしのパッションはどこから」というテーマで報告を行った。報告では、貧困地域であるスリランカ北部での幼稚園建設のプロセスが現地の写真とともに説明され、また女性と水の衛生を守るため、水道やトイレを設置するなどの現地の生々しい情報が紹介された。そして、コミュニティの女性のエンパワーのためのトレーニングにも力を入れていることが述べられた。「彼らの声を研究を通

して残したい」が原動力であるという発言、そして最後の「福祉人として生きる」という言葉より、松尾氏のパッションがスクリーンを通して確実に伝わってきた。

最後に、羽鳥氏は研究の内的動機および環境的要因をめぐって「研究を続ける Passion を考える」というテーマで報告を行った。まず、研究を始めるきっかけが、精神保健福祉現場実践での違和感と、より良い援助実践とは何かという探究心であった、ということが述べられた。また、研究を続ける内的動機について、実践で葛藤するソーシャルワーカーの存在、そして目の前にあるクライアントの存在に勇気づけられることが研究へのモチベーションへと繋がるという話があった。研究を続ける環境的要因では、指導教授との出会い、研究方法や研究プロセスの明確化、共に学ぶ院生の存在、実践現場および家族の存在があげられた。

最後に、今回の特別企画として国儒氏（同志社大学大学院大学院生）が「外国人大学院生の研究上の困難とその克服方法に関する調査報告」というテーマで調査の結果を報告した。外国人大学院生の研究生活の改善、研究の質の向上、日本ならびに国際社会に貢献するような研究の増加に向け、外国人大学院生の研究上の困難とその克服方法が、インタビュー調査を通して整理された。研究上の困難については、「研究方法の不明確さ」「言語の壁」「国際研究の苦労」「情緒問題」「研究環境の影響」といった点が述べられ、克服方法については、「制度上の補助やサービスを利用する」「他人から支援してもらう」「自分で努力して克服する」「双方の積極的な動きによって乗り越える」という4点が提示された。

質疑応答では、バーンアウトせずワークライフバランスがとれる方法、投稿論文の修正方法、また、外国人大学院生への調査の詳細内容に関する質問があり、5名の報告者により、適切な回答や提案がなされた。質疑応答の後、関西社会福祉学会役員の阪口春彦氏より閉会の挨拶をいただき、図らずも新たなアイデアや研究につながる可能性があるという「めぐりあわせ」の話がされた。最後に、日本社会福祉学会長木原活信氏は、パッションの意味について、「情熱」だけではなく、キリスト教圏では「受難」という二つの意味があると述べ、さらに、パッションからコンパッションまでに話題を深め、本情報交換会をふり返った。

無事、第49回若手研究者・院生情報交換会が閉会となった。最後になるが、本情報交換会の開催にあたりご協力を賜った会員や関係者の皆様には心よりお礼を申し上げたい。